
眠り姫

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠り姫

【Nコード】

N3067K

【作者名】

白夜

【あらすじ】

ロール王国のビシユヌ城。

ここにリエルとフォンはいた。

執事であるフォンと姫であるリエル。だが、フォンの胸の内には違った思いが去来していた……。

わたくしはいつも困っております。

何を隠そう、わたくしのお使いしているアリエル姫についてであります。

姫様は執事であるわたくしにいつも無理な要求をしてくれます。

いつも無理難題を。

いつもどうしても不可能なような我侭を。

わたくしはいつも困ってしまいます。ですが、それでもわたくしはその要求を呑まなくてはいけません。何故ならばわたくしは姫様の執事なのですから。

姫様はわたくしの俊敏な対応に満足したかと思うと、

「ふわあ……なんだか眠くなってしまうましたわ」

眺には光る粒を浮かべながら、姫様はわたくしにそう告げるのです。彼女はただ無邪気に遊んで、疲れて眠るだけです。

わたくしはそんな彼女を形容して心の中でこう呼びます　眠り

姫　と。

ふわり、と。

柔らかな香りが鼻孔をくすぐる。

今日、フォンが入れたのはハーブとドライフルーツ等をブレンドした「プリンス・オブ・ウィンドル」である。名称の由来はかのウインザー七世からのもの。

金秋の大気が鋭く心を抉り、心を凍えさせる。フォンが執事として仕えているのは大陸の西半分を支配しているロール王国のビシユ

又城である。小高い丘に聳え立つその城は堅牢という称号だけでなく、一種の芸術作品としての側面も持つている。ロール家が代々受け継いできたロール王国の威信を示す媒体としてはこれ以上のものは無いだろう。外壁は防衛も兼ねているため、白を基調としたシンブルかつ繊細なデザインである。未だにその白が薄汚れていないのはこのロール家が強大な軍事力を誇り、籠城戦など前例に無いと暗に証明しているのだろう。

頑丈である城門を越えた先には眩いほどの装飾が施された城の内部が見えてくる。外面はシンプルに、内装はこれでもかと言うほどに飾り付けるのがロール家のしきたりだ。当に豪華絢爛という四字熟語が相応しい。まず見えるのは今の時代かなり高価とされているガラスをふんだんに使用したシャンデリア。その奥に見えるのは城お抱えの画家に書かせた王とその後の肖像画。この玄関から伸びるホールだけで数十人が一生遊んで暮らせるほどの金銭が掛けられているに違いない。

そのさらに奥。そこにアリエルの部屋はあった。

一人一人分の生活スペースとしては明らかに大きすぎるだろう。暖炉があり、幾つかのソファが所狭しと並んでいる。一介の貴族如きでは到底手が届かないような豪華さ、これがアリエルの部屋だった。飾りつけばいいさ。

そう、その醜い顔を化粧して隠してしまうほどにな。

アリエルは美しかった。明眸皓齒、そう正にこの言葉だ。様々な言葉で飾り立てるまでもない。百人が見れば百人が心奪われ、そしてひれ伏すだろう。羨望以外の感情が何か浮かんでくるとすればそれは嫉妬ぐらいのものである。まるで魅了の魔術でもかけられたかのように皆が憧れる。それがアリエル姫だった。

「ねえ、フォン。今日はどうしようかしら」

紅茶を楽しんでいたアリエルはカップを置き、フォンに問いかけた。香りが飛んでくる。柔らかな香りだ。紅茶の香りにも負けはしないアリエルの香り。

「姫様のお気に召すままに」

僕はそう言つて姫に頭を垂れる。

慣れたものだ。

あなたは僕を信用して下さっているのだから。

微笑みは隠さずにフォンは姫に答えた。

「うーん。そうね……じゃあチエスなんてどうかしら」

「はあ、よろしいのですか？ またわたくしの圧勝という形になつてしまふと思われるのですが」

一つの懸念をフォンは姫にぶつけた。

言わずもがな、このアリエルは大変な我侷な人であつた。フォンにはいつも無理難題を押し付ける。この季節では採れないような果物を採つて来いだの。神話の中に出てくる奇怪な、神々しい動物が見たいなどというのだ。

フォンはいつも困つてしまふが、何とか今までのことは乗り越えてきた。何故ならばフォンは彼女の執事なのだから。

そして尚且つ姫は負けず嫌いときたものである。勝負事では人生経験の長いフォンのほうが圧倒的に有利で彼女の勝利はほぼ皆無に等しい。あからさまに負けたりすればかえつて彼女の自尊心を傷つけてしまうことになるので、フォンは苦手であつたのだ。

「ふふん。今日は特別ルールです。貴方はわたくしが二回駒を動かさないと行動ができません。意味が分かりますか？」

これが彼女、アリエル姫だ。

自分勝手な典型的なお嬢様。

つまりは、アリエルは自分が圧倒的優位に立つた状況でフォンとゲームがしたいという事だつた。得意げな顔でそう提案する彼女にフォンは溜息一つ。

「承りました。ですが、わたくしが勝つても逆上なさらなくてくださいよ？」

挑発と取られたらしい。

彼女は顔を赤くして彼にこう返す。

「わ、分かっていますわ。貴方こそわたくしに負けて吼え面をいかしても知りませんわよ」

「姫様。そのような言葉遣いはなるべく謹んで下さいませ」

どうせ、効き目は無い。

そう分かっているながらもフォンは彼女を諫めなければいけない。

何故ならば、フォンは彼女の執事なのだから。

アリエルはフォンの発言を簡単に聞き流すとすぐさまチェスの準備に取り掛かってしまう。熱くなると周りが見えなくなってしまうのも彼女のいい側面であり、悪い側面でもあった。

自分勝手なお姫様は今日も僕を振り回す。

何も知らないまま朽ち果てる。

いや、そうじゃない。

お前の全てを知った瞬間の絶望の表情が見たくて僕は道化を演じているんだ。

チェスは淡々と進んでいった。何か事件があったか、と聞かれればアリエルの思考時間の長さで待ったの回数の多さくらいのものである。

結果は言うまでもなくフォンの圧勝だった。テーブルに突っ伏して敗北を受け入れ切れていない様子のアリエルはこう言葉を漏らした。

「な、何で勝てないの。わたくしはやはり無能なのかしら」

感傷に浸っている彼女に対してフォンは言葉を投げかけなくてはいけない。何故ならばフォンは彼女の執事なのだから。

「姫様。そんなに感傷なさらなくともよろしいのですよ」

「気休めはよしてちょうだいな。敗者に掛ける言葉は無くってよ」

「いえいえ、わたくしに勝てる者などこの城にはそうそう居りません。そのわたくしを姫様はあと一步の所まで追い詰めたのです。それだけでも姫様の才能の程が伺えるのです」

勢い良くアリエルは顔を上げた。目はキラキラとされていてフォンの次の言葉を心待ちにしているようである。待ちきれなくなったア

リエルは自ら問いかける。

「お、お父様もフォンには」

「ええ、わたくしは多分負けられないでしょうね。もっと自信を持ってもよいですよ姫様。あなたはあのカール様の唯一の娘様なのです。そんな貴方が無能なわけがないのですよ」

自分でも笑えてくる。

こんな事を簡単に言葉にできる自分にだ。

あ、と呟きを漏らしたかもしれない。

アリエルはその言葉を受けると俯いてこう言った。

「ふわあ……何だかもう疲れてしまいましたわ。眠たくなってしまいました」

瞳に光るものを浮かべながら彼女はそう告げる。いつものことだ。アリエルは昼間に眠くなってしまう体質らしい。そう他の執事達や城の者から聞いていた。

「左様でございますか。でしたら、お休みのための歌や物語等をお聞かせいたしましょうか？」

「わたくしを子ども扱いなさらないで。一人でも大丈夫です。下がってよろしい」

「畏まりました」

このような軽い冗談もフォンとアリエルのような関係だからできるようなものだ。普通の心無い人間であれば打ち首も十分考えられる。三年。それが、フォンとアリエルの過ごしてきた日々の重さだ。それ以上でもそれ以下でもない。

フォンは部屋を去る間際、アリエルに聞こえないように呟いた。

「お休みなさいませ姫様 あなたに永遠の眠りが在らん事を」

ドアはその瞬間閉じられた。

フォンの本名はロンド・ジ・グレゴリオという大変長つたらしいものであった。今ではもうその名を使うことはない。何故ならばフォンは今、一人の復讐者にすぎないからだ。月日は遡る。

今からちょうど数年前。フォンは実年齢十歳にも満たない少年であった。世間知らずで、態度だけは大きなただの子供。ただ一つ他の子供との差異があったとするならば、それは彼のグレゴリオ家の王子、唯一の一人息子であった立場である。

悲しい話だ。

悲しい話だ。

「大丈夫ですからね。私がついていきますから」
母上の膝の上は暖かい。太陽のような匂い。やさしい指先で僕の髪の毛は弄ばれる。

父上の本城に僕と母上はいた。一週間くらい前であろうか。僕と母上は静かな国境地帯で生活を送っていた。都に近くはないが、母上がいて沢山の召使達がいて、何不自由の無い自由な生活だった。城と言うよりは何処かの別荘といった様子で王族が住むには少しばかり貧相ではあるが、僕と母上は満足していた。

その静寂な日々は夏も終わりのある朝のこと、唐突に破られた。肌触りのよい風が吹く季節になったと思っただ途端に王都より使いの者が現れて僕と母上を半ば強制的に連れ去って行ってしまった。母上が言うには「父上があなたにお会いしたいと言っておられるのですよ」とのことだった。正直言って僕にはそんな理由付けなんてどうでも良かったのだ。ただ、親子三人で過ごせるという事が僕にとっては大変に嬉しかったのだ。

母上は美しかった。西大陸一と謳われるその容姿には誰もが惚れ惚れしてしまう。僕も決して例外ではない。母上のことが大好きだった。誰に対しても優しく、誰に対しても誠実な母上は僕にとって理想的な女性像になっていたのだ。優越感が心を満たしていたのか

もしれない。父上でもなく、他の男でもなく、母上を独占しているのは僕なんだと。皆に自慢したくて仕方が無かった。

「ねえ、ロンド。私のことは好きですか？」

髪をくすぐったく触っていた母上は僕にそう問いかけてきた。母上の笑顔はいつものように輝いていた。

「もちろんです。この世の中で一番好きなものは母上に決まっています」

「ありがとう。じゃあ父上のことは？」

む、と思わず僕は唸ってしまった。確かに父上のことは一人の間として、一人の武人として、一人の為政者として尊敬しているのだ。だけど、父上は僕にとっては目の敵の一人でもあったのだ。母上を僕以外で独占できる可能性のある人間。それが父上であったのだ。

「父上のことは尊敬していますし、好きです。ですが、母上のことを独占している父上は正直に言えば少し嫌いです」

僕は心の内をそのまま吐露した。

母上はそれを聞くと笑い出してしまった。僕は少しだけむっとなってしまう。

「フッフ。そう、ますます嬉しいわねロンド。でも父上のことは嫌いになってはいけませんよ。私のせいで二人が争うのを見るのは心痛んでしまいます」

「わ、分かりました母上。父上のこともこれからは心の底から愛します」

「そうですね。それが、一番大切なのですから」

母上はまた僕の髪を撫でる。際限も無く、終わりも無く。僕はそれが心地よくなって静かに目を閉じていってしまう。暖かい母上の膝はどんなに高級な枕よりもいいものであると僕はこの時初めて実感した。

深い闇が堕ちてくる。

それは僕を永遠の闇へと誘い、溶かしていく

ドアを閉めたフォンがまず初めに目視したのは城の中でありながら鎧を身に纏う巨大な大男であった。

「今日も姫様のご機嫌取りかグレゴル人。穢れた手で気安く姫様の身体に触れていやしまいな」

グレゴル人

鎧の中より見えてくるその醜い顔を隠すことなく話しかけてきた大男マルク将軍が発したこの言葉がフォンの心を引き裂いた。

グレゴル人とは元来西大陸でこのロール王国と睨みあっていたグレゴリオ王国を構成していた民族の名称である。ロール人とは対照的な黒い髪に真珠の目。今となつてはこの言葉も一種の差別用語にしかかつておらず国王が主導的に差別的政策をやつていないだけまだまじだが、ロール人の心の深くにはグレゴル人への優越感のような感情が芽生えていたのであった。

殺したい。

今すぐこの大男を血祭りにしてやりたい。

フォンは隠すことなど無い。グレゴル人であった。そんな彼が王国の、しかも姫の執事として雇われているというのは前代未聞の事実であった。そのため、フォンへの宮廷内部からの敵意ある視線というのも、もはや避けようの無いものであった。

「わたくしは執事ですから。あなたのような野蛮な行為は慎んでい
るのです」

「ふんつ。よく言うわ。グレゴル人は何をしでかすか分かったものではないというのに全く陛下は何を考えておられるのやら」

薄汚い無精髭がフォンの光彩を汚す。昨晚か、あるいは今飲んだのであるう、強い酒の臭いもフォンにとっては許せないものであった。フォンにとってどんな人間が嫌いかと尋ねてそれを形にしたものがマルク將軍だといっても差し支えはないだろう。

「わたくしはグレゴル人です。ですが、貴方の考えているような野蛮な行為はいたしません。わたくしの誇りに掛けて」

「何が誇りだ。そんなものそこらに落ちている埃よりも薄汚いものではないのか」

これ以上は、無理だ。

フォンは自分の感情を抑えきることができない。例え此処で殺されたとしてもこれ以上侮辱されるのならば仕方が無い。母上と父上の威信に掛けて。

「これ以上の侮辱はわたくしへの挑戦と見なしますがよろしいですか？」

「ほう。生意気な。いいだろう、執事風情がどれ程のものか試してみるのが面白いだろう」

構えを取る。

勝負は一瞬。この大男に勝てるとしたらそれしかない。フォンは心に決めた。

蹴り出す足は龍の如く

「止めんか！」

二人の動きが止まった。

同じ方向を凝視する。

この国の王。カール・ラ・ロールが立っていた。

王冠は金色。堀の深く色気のある顔立ちに威信の象徴ともいえるマント。二人は揃ってその御前に膝を付いた。

「こ、これは国王陛下。このようなお見苦しい所をお見せしてしまい大変」

「よい、マルク。もうよいのだ。私はお前が人の話も聞けない野蛮人だという事を認識したまでだからな」

見下すその視線は才能によるもの。抗うことはできない。人を引き付ける才能、人を統べる才能、人を従わせる才能。この三点を所有する人間のことを我々は王と呼び崇め奉る。さらにその才能のたことをカリスマとも言ったりする。

「へ、陛下。ですが」

「言い訳はよいマルク。次からは気をつけるのだぞ。フォンに対する差別は極力避けよという命を心に刻み込んでおくのだ。下がってよい」

「はっ」

返事と共に、その身体とは似つかわしくない俊敏な動作で王の御前をマルクは後にする。

「ちっ。命拾いしたなグレゴル人」

舌打ちと共にそう呟いたマルクのことは心に刻んでおこうとフォンは思った。

「いや、怪我は無かったかフォン」

「はっ。何も無く、五体満足であります」

「すまないな。君にはグレゴル人というだけで多大な苦勞を掛けてしまっている。このことは王ではなく、カールという一人の男として詫びておきたい」

騙されるな。

こいつが全ての元凶なんだ。

一国の王が一介の執事に頭を垂れている。これは国家の威信を揺るがすような光景であり、フォンにとってもさすがにこれはやりすぎであると判断を下さざるをえなかった。国家というのは誇りと威信によって成り立っているのだ。

「へ、陛下。お止めください。わたくし如きにそのような」

「いや、よいのだ。私は私のしたいように人生を謳歌している。この光景を見て私への忠誠心を無くすような輩がいればそれは元々この城に居る価値の無い人間だ。君が気にする必要は無い」

いい人なんかじゃない。

こいつは、こいつが父上と母上を殺したんだ。

強い心でフォンはそう思い込むのがやっとであった。

理想の国王。当にカールはその通りであった。だが、違う。フォンにとって彼は全ての諸悪の根源でしかないのだ。

物凄い振動と物音で僕は目を覚ました。

地震か？ 一瞬だけそう思ったがそれは否定されてしまう。このような周期の地震は今まで経験したことがないからだ。まるでそうこの城の周りで戦争でも起きているかのような。

「目が覚めましたか」

いつの間にか、僕は母上の膝の上ではなくソファの上へと降ろされていった。天からの使者かと思間違えるほどの母上の表情は何やら悲しみに満ちているように見えた。

母上。早く僕のことを膝の上に置いてください。

ソファの上もいいのですが母上の膝には敵わないのです。

言葉が頭の中で練成される。だが、出てこない。母上の言葉にはやはり並々ならぬ様子が伝わってきたからだ。そして僕の口から発せられたのは、

「どうしたのですか母上。何かあったのですか？」

といった明らかに状況を読んでのものであった。

「……いいですかロンド。これから話すことをよく聞いてください」
遊びではない、訓練でもない、リアルな感覚が母上の言葉から伝わってきた。おふざけではない、これから発せられる言葉の一つ一つが僕の運命を決めるものであると本能的に理解した。

「この城は今籠城戦を強いられています。籠城戦とは分かりますね。城に籠って戦うことです。この父上の城が籠城戦を強いられているという事がどういう事を意味しているか分かりますか？」

僕は素直に首を横に振った。母上の意向で未だに僕には詳しい兵法らしいものが教え込まれていなかった。そのため籠城戦という単語の意味を推測するだけで僕は精一杯だったのだ。

「この国が　もうすぐ滅びるといふことです」

……は？　母上。貴方は一体何を。

だって母上は誇らしげに語っていましたよ。

このグレゴリオ家の軍事力は強大だって。

父上の統率能力は大陸一であるって。

「母上、そんなの……冗談なのですよ。僕がまだ子供だからってそんな嘘をつくのは止めてください」

震えている。声が、身体が、心が。自分でも分かった。もう聞くまでもない。母上の言葉は全て真実であろう。だけど認めたくない。僕の住んできたこの国が、僕の生まれたこの国が、母上とずっと一緒に居るはずのこの国が滅びるなんて信じたくはなかった。

「嘘ではありません。私達が何故父上の住むこの城まで移動させられたのだと思いますか。それは戦火が国境付近まで迫っていて私達が危険に晒されていたからです。私達と戦闘を繰り返しているのはロール王国の者達です。父上は先の大きな戦い、中立の緩衝地帯での大きな決戦に敗れました。そこからです。戦局は一気にあちらへ傾き、私達のこの城も風前の灯です」

母上はいつもには見せない厳しい表情で僕に告げた。全て紛れも無い真実。この国は滅びる。つまりそれは　父上と母上が殺される。

そのことは僕でも理解できた。

「い、嫌です。そんなの。母上が殺されるなんてそんなの絶対にダメです！」

涙が零れる。せき止め切れない。感情の波が溢れてくる。だめだ。僕はグレゴリオ家の長男なんだ。父上のように強くて母上のように優しくなきゃいけないんだ。

「まだ殺されると決まったわけではありません。大丈夫です。私は

いつでもロンドの傍にいますわ。だから、あなただけは 強く生きて」

え？

殴られた、のか。頭を一撃。それが僕を誘う子守唄になってしまった

アリエルは美しい。 故に繊細で扱いつらい。フォンがこの仕事に就いた当初に抱いた感想はそれであった。

高値の花。一輪の花。何か風でも吹けば消えてしまうような可憐な花。今のアリエルからは想像もできないような光景がフォンの光彩を支配していた。

「今日からお前の執事をしてもらうフォンだ」

国王は簡単な紹介でフォンとアリエルを対面させた。

世界からその存在を覆い隠してしまうかのような屋根付きの高級なベッド。その中で縮こまるように。何かを恐れるように。アリエルはそこにいた。

まるで世界から取り残された

フォンは思わず息を呑んだ。決してそれはシーツを胸元まで引き寄せる動作が可愛らしいとかそういう類のものではない。

ようやく、ようやくだ。

フォンはそれほどでもないがアリエルのほうは緊張からだろうが、声が上がらず態度も挙動不審である。

季節は春であった。アリエルの部屋は暖かい日差しに照らされて装飾がなお際立っていた。

「フォンと申します。姫様、どうぞなんなりとわたくしをお頼りください」

一般的な教養。さらには執事として最低限のことはフォンは既に

身につけていた。第一印象は恐らく完璧であろうとフォンは推定した。

まずはお前だ。アリエル・ビ・ロール。

お前は僕抜きでは生きていられなくなる。

そうさ、お前は僕に籠絡される。

そして最後には絶望の淵に立ったお前を殺すんだ。

「は、はい。分かりました。よ、よろしく願います」

声が震えていた。

この頃のアリエルはまだ人見知りが激しく、大人しい少女であった。フォンが着てからである。彼女が変わり始めたのは。

「フォン、ちよつといいか」

国王がフォンに耳打ちをする。囁く声を聞き逃すまいとフォンは躍起になる。

「見ての通り、アリエルはあの調子なのだ。執事など君以外ではこの十数年間とつたこともない。君の活躍に期待している」

「はっ。お任せを」

国王はそういい残して部屋を出て行ってしまった。ここからフォンの戦いが始まるのだ。

「姫様。何かご入用はありますでしょうか」

「あ、ありません。大丈夫です」

「左様で御座いますか。ではご入用の際には何なりとお申し付けくださいませ」

「は、はい……」

アリエルはベッドからは降りず、声と身振りだけでフォンの対応に答える。足でも不自由なのだろうか、そう疑ってしまうほどアリエルの様子はおかしかったのだ。

「姫様。どこかお体の具合でもよろしくないのでありませんか？」

「そ、そのような事はありません」

「会って間もないわたくしが言うのも難なのですが、姫様のご様子は尋常ではないように存じます。もしかすると、わたくしなどでは

姫様のご希望に沿わないのでしょうか」

「そ、そんな。あなたは優秀な人材であると父上からも聞き及んでおります。あなたに落ち度は無いのです」

微かな力を振り絞るようにして、アリエルはフォンンの疑念を払拭しようとする。か弱いアリエルの限界が此処だったのかもしれない。

「わたくしは、その、お恥ずかしい話ですが父上以外の殿方とまともにお話をしたことが無いのです。ですから、あなたと二人きりになってもどうしたらよいやらで」

顔を逸らし、毛布の中へとうずくまる様にしてアリエルは返答する。照れているのだろうか。フォンはそう思うことにした。

いい傾向だ。

ハハハ。一目惚れってわけか。

嘲り笑うことを隠すのでフォンは精一杯だった。

「左様でございましたか。よろしいですよ。わたくしのことなど男として意識せずとも。あなたはいつものように明るく振舞ってくださいまし。国王からあなたは明るくて優しい娘だと聞き及んでおります。わたくしもベッドに囚われの姫様よりはそちらのほうが美しいように感じます」

「そ、そんな筈はないです。だってあなたは　いえ、何でもありません」

アリエルはベッドから身を起し、何かを訴えかけるかのように語る。

問題は無い。

全て計画の通りだ。

フォンはそう思い込むことにした。

「わたくしは流浪の身で放浪していましたが所を国王様に拾われて今に至ります。執事というこのような大変素晴らしい役職までお与えただいて、わたくしはもうそれだけで姫様のお役に立ちたいと心の底から願うしいのです」

震える。

嘘で塗り固めた自分自身に。こんな儂げな少女を欺こうとしている自分自身に。

アリエルはまたもや俯き、そしてこう言った。

「フォンさん。すみませんがわたくしは眠くなってしまいました。下がってよろしいですよ」

シーツを湿らせるような暖かいものが僅かに瞳から零れていた。恐らく欠伸でもしたのであるとフォンは考え、部屋を後にした。これから彼女に起こり得る不幸を噛み締めながら。

ゴツゴツとした感覚が背中から伝わってくる。

ここは？

先ほどまで母上と暖炉の暖かさに囲まれていた僕にとってはいささか肌寒すぎた。

何処だ？

瞼を、開ける。

酷く眩しいと感じた。太陽の光。鳥達の囁き。森の声。そして城を肴にして燃え盛る炎。

凍りつく。

見間違えるはずも無い。僕は城から数千メートル離れた何処かの陸にいた。そして、その現実を目の当たりにした。

「そ、そんな……」

眩く。

あれは紛れも無く父上の城。大陸一の守備力を誇るはずの城。僕と母上と父上と共に暮らすはずだった場所。

力なく僕は崩れ落ちた。膝を付く。石が当たって傷ができたが僕

は感覚を失っていた。虚ろな視線だけは燃え盛るその城を捕えて放さない。

「気がつきましたか若君」

生気の無い瞳を声の主へと向ける。背は高い、少なくとも僕なんかよりずっと。顔は形が整っていた。少し歳を得ているがそれでも男としては美しい部類に入るであろう。そんな鎧を身に纏った男が僕に話しかけてきたのだ。

追憶する。

思い出した。こいつは父上の近衛兵。特別に編成された護衛部隊で父上も選りすぐりの戦士なんだと自慢していた。その数人の中にこの男がいた。忘れるわけもない、この美丈夫は一度目視すれば忘れることはできないであろう。だが、同時に考察する。

何故お前がここにいる。

「お前、確か父上の近衛兵だったな」

震える声で僕は聞いた。

「……………」

「何でお前がここにいる？」

怖い。

「……………」

「父上と母上はどうした？」

出来るなら返答しないでくれ。

「……………」

「答える」

その答えを僕は聞きたくない。

眉一つ動かさず僕の話聞き流すような態度でいるその男に僕は苛立ちを隠しきれない。それは形になる。

「答えるっ！」

何とか届く胸倉を力いっぱい掴んで僕は男に返答を強要する。周りから見れば滑稽であったろう。この無様な僕は。

パシン、と。

乾いた音がした。

僕の目線はその男より少し外れていて僕はそのことに驚愕した。その後頬から痛み感覚が伝わってきて殴られたのは僕なんだと実感する。手を放す。愚かしく見えたのだ。自分自身が。

「まずは現実を見てください若」

男が言葉を紡ぎ始める。

嫌だ。

「あなたの父上は 死にました」

嘘だ。

「母上もどうなったかまでは分かりませんが丁重なもてなしなどは受けていないでしょう」

嘘だ。嘘だ。

「あなたの身分は王子から身寄りの無い不幸な子供へと転落したのです」

「嘘だっ！」

叫んだ。吼えた。

間々ならない現実。どうにもならない現状に。

「あなたの母上は俺にあなたの面倒を見て欲しいと預けました。俺はその命を全うするつもりです。 若君はどうなされますか？」

尋ねられた。心を抉る。つらかった。認めたくない。両親が死んだという事実。

だけどそれは全てリアル。

受け入れよう。心が荒んだ。受け入れてしまえば簡単だ。そう、僕が成すべきことはただの一つ。

復讐。

「僕は、生きたい」

心の底からの願い。そうだ僕は生きなくちゃいけない。父上と母上の敵を取るために。偉大なるグレゴリオ家の威信を見せ付けるために。

僕は生きなくちゃいけない。

それは牢獄。永遠に止まることのない輪廻の渦に自らを置くという事。それでも僕は英断した。大好きな母上、父上のために。

「あなたは目に焼き付けておかなければなりません。この城が放出している炎の色を。臭いを。悲しみを。あなたは今日という日を忘れてはなりません。この炎こそがあなたを突き動かす復讐の炎となりえるのですから」

炎はどこまでも飛んでいく。そして、永遠に燃え続ける事はない。

ビシユ又城は小高い丘に聳え立っている。地平を一望できるその立地は為政者の居城としては申し分ない。周囲を取り囲むようにして乱立する森の木々たちは天然の防衛線と化しており、この城に攻め入るのは空を飛ぶのと同じく容易で無いことが一目できる。

逆に見てみればここは監獄だ。周囲の自然から切り離された芸術。自然の中で生きようとする人間にとってはここは狭すぎるであろう。城の中庭。このような城にも微かな自然は切り取られ残っていた。特にアリエルの要望からである。ベランダにそのまま森を埋め込んだようなその場所は確かにアリエルにとってはお気に入りの場所になりうるであろう事が推測されたのだ。

「うわあ、綺麗ですね。見てくださいフォン、この花ピンク色がとても美しいですよ」

無邪気に歩き回りながらアリエルは花の観賞を楽しんでいた。フォンはそれを邪魔しないようにただついていくだけである。たまに「ドレスが汚れてしまいますよ」など小言を挟みながらも大体のことはアリエルの思い通りにフォンはさせていた。

「はい、そうでございますね。姫様と同じように美しいです」

「お世辞が上手いのね、あなたは」

「いえいえ、決してそのようなことは」

笑いあう。楽しかった。フォンにとつてはこのアリエルと共に過ごす時間がとても大切だった。だが、それは表の感情だ。心の裏ではまだあの炎が燻っている。

雁が空を飛んでいた。仲間との連絡を取るためであろう鳴き声はとても自由で清々しいものであった。少なくともフォンはそう感じた。

「『人は鳥を見ると旅に出たくなるそうだ』有名な人の言葉。あなた、知ってる？」

「いえ、存じ上げておりません」

「言葉の通りよ。あなたはそんなふうにしたことはないの？」

「わたくしは元々放浪の身ですから。旅というものには羨望など抱かないですよ」

そう、とアリエルは視線を放す。仕草は昔とまるで変わらない。年頃の少女のような繊細さ、王女としての華やかさ、昔のまま。唯一変わったものがあるとすればそれは心の距離であろう。

アリエルからの一方的な。

境界がある。人と人との心の境だ。神聖なるその空間を切り開くことができるのはその本人の意思だけだ。

心を揺り動かすことができるのはいつだって他人ではない。結局は自分自身の意思の重さだ。輝きを持って照らし出すのは他人の思いだ。だが、そんなアリエルの思いは、その神々しい光は未だにフォンの心には届いていない。

季節は春のはずなのに妙に肌寒かった。空気が湿る。匂いで分かった。

「わたくしは一生この城の中で生きていくのでしょうか」

突然の呟きはフォンの耳に届いた。

悲痛な叫びだ。

花を摘みながら、アリエルは言葉を紡ぐ。

「わたくしはただこの大陸で生きていたいただけなのです。権力なん

ていりません。人望もいりません。財力もいりません。ただ、わたくしは……」

くしゃり、と。

アリエルの持つていた花が砕けた。同時に彼女の心も

「為政者、国家元首とは常にそのような運命をその身体に背負っているのです。それは避けられないことです。貴方は誇り高いカール様の子として生を受けたのです。どうかその意味を今一度ご確認ください」

「わたくしは、そんな、そんなものになんてなりたくはありません。わたくしは自然が好きです。この花も草木も森も動物達も皆好きです。わたくしは彼らと共に生きていただけです。この国なんていりません。わたくしは――」

「では、わたくしが代わりになりましょうか？」

驚いたアリエルの表情がフォンの前に転がっていた。

貴様、僕の前でよくそんなことが言えたものだな。

ああそうだ。代わりたいたいなら代わってやるさ、お前を殺してな。

フォンには焦りからか脂汗が滲み出ていた。つまらないことを口走ってしまったと。このことを今言うべきではなかったと。感情に身を任せ発言した自分を強く恨んだ。

「冗談でございます。姫様、そのようなことを仰られてはわたくしが国王陛下に叱られてしまいます。どうかご理解くださいませ」「ごめんなさい。口が過ぎましたわ。あなたは優しいですね、フォン」

「そのようなことはありませんよ」

そう、優しくなんてない。

僕はあなたを騙しているのです。

悲しかった。恨みはある。父上と母上を殺したカール家を許さない。その感情は確かにある。だが、

あなたは何故、僕のことを

気に掛けてくれる。一人の人間として対等に接してくれる。それだけでフォンの心は満たされる。この数年間でフォンが得たものはアリエルの心の温かさだったのかもしれない。

「お父様から聞いていますか？ わたくしが東大陸の王室へ嫁ぐというのを」

「はい、既に」

東大陸には既にロール家と同等、あるいはそれ以上の強国が設立されていた。名を『フランドル帝国』という。その次期皇帝であるブリギットという王子がアリエルに求婚を求めているという話だ。

カール国王にとって、この提案は長考を要するものであった。戦争の火種というものは何処に転がっていてもおかしくない。ただそれを見つけ即座に対処できるかによって国の命運は決まってくるのだ。この求婚の話は正にそれである。つまり、カールが国の為にするべき決断は 自分の娘を売り渡すというもの。

正気な親の成せる決断ではない。しかし、カールは王冠をその頭に当てた瞬間より普通の人間ではない。個人の損得によって国を動かす王ほど滑稽なものはない。カールの下した決断は正しいものなのだ。

「わたくしはお父様がどれ程苦悩し、このことを判断されたのかは分かっているつもりです。ですが、わたくしはただの道具なのでしようか。戦争を回避するためとはいえ、これではまるで贈り物ではありませんか。わたくしはあの雁達にも劣る存在なのですか？」

知らぬ間に、アリエルの瞳からは涙が零れていた。欠伸から出る副産物などではない。感情が堪えきれなくなった時、人は涙を流すのだ。それは常に美しく、悲しい。

嗚咽が漏れるのをアリエルは懸命に耐えているように見えた。

「姫様、そのようなことは」

「違うというのですか。東大陸に行くという事、それ自体が旅だとしてもいいのですか。フォンは優しいですものね。 あなたはそれでいいのですか？」

酷く艶かしく見えた。

そう問いかけてくる姫は。

「わたくしは貴方様の執事です。それ以上でもそれ以下でもない存在です。わたくしにはこれ以上のことを言及する余地はありません」

「逃げてください」

は？　と思わずフォンは聞き返す。

「わたくしと一緒にこの城から逃げてください。これは命令です」
言っている意味を理解するのに数刻。自分自身の中でそれを整理するのさらに数刻。フォンにはそれだけの時間がかかった。そして理解する。

滑稽なる姫よ。

お前の未来は今自らの手によって摘み取られたのだ。

アリエルのものとは比べ物にならないほど価値の劣る執事服を掴みアリエルは懇願する。フォンは困惑していた。それは戸惑いか、あるいは

「数日後、お父様がお出かけになる日があります。その時に逃げましょう。フォン、だめですか？」

答えは一つしかなかった。

「分かりました。わたくしが、姫様のことを地の果てまでもお守りいたします」

執事として、復讐者として。

彼は決断した。このことが自らの幸せに直結することを望みながら。

彼は唇が緩むのを抑えきれない。

雁たちは旅立っていく。彼らは何処へ向かうというのか。そう、
いずれも　ただ己のためである。

フォンの宿舎は城の中にあつた。アリエルの部屋に比べればさすがに見劣りするが、一執事としては破格の持て成しなのだろう。まず、一人部屋である。家具は必要最低限のものは揃っており、窓もある。これだけでフォンにとっては必要十分だった。長い間野宿やら何やらに身体が慣れていたフォンにとってここは天国のように思えたかもしれない。

望月が妖しく光を放っていた。天然の炎である。本を読むことも事欠くことはない。風は開け放った窓から際限もなく進入してくる。冷たい。心までも凍る。フォンはそう思った。

執事服を乱暴に脱ぎ捨ててベッドに身体を投げ入れる。仰向けになり、手を頭の後ろへと回す。フォンはいつも一人になると思い出すことがある。言わずもがな彼の母のことである。心の中の母上はいつまでも美しいままだ。いつまでもフォンを愛おしいと感じ、愛し続けてくれる。

待っていてください母上。

形造られた愛玩具。その典型が妄想だが、フォンのそれは妄想などではない。頭の中で綺麗に取り残された絵画。フォンにとって記憶の中の母は心の支えだ。

もうすぐにあなたの仇は打倒されるのです。

力が湧いてくる。自分は母上のためならば何だってできる。そんな自信がフォンの内にはあつた。

本当にこれでいいのか？

悪魔の囁きが彼の頭蓋に響いた。

考えてはいけない。思い出せ、あの炎を。フォンは自らに言い聞かそうとする。

あの娘は。

アリエルは、本当に自らの恨みの対象なのか？

数年間共に暮らしてきた少女。無邪気で笑顔の美しい少女。カールの娘である少女。いずれもアリエル・ジ・ロールを表す肩書きだ。

一つでも欠けることは許されない。だが、フォンが見てきた少女は、少なくとも最後の肩書きなどとは関係がない。ただの女の子。罪はない。

殺せ。

本当ならば、もっといい関係でいられたかもしれない女の子。

殺せ。殺せ。

本当ならば、自分の恋慕の対象であつたかもしれない女の子。

殺せ。殺せ。殺せ。

「何を考えているんだ僕は」

自分を糾弾する。身体の向きを変え、シーツを強引に頭の上まで引き寄せる。フォンは自分自身が分からなくなっていた。

簡単なことである。城の外まで連れ出して、その場で殺し、自分は逃げる。それでいいじゃないか。そう心に刻む。

出来るのか？ 僕に。

鳩の鳴き声が聞こえた。

闇夜の趣と共にそれは現れた。フォンはそれに聞き覚えがあつた。鳩は月の光を背景にそこにいた。それは平和の象徴などではなく天使か、それとも悪魔か。フォンにはそのいずれかに見えた。

伝書鳩である。フォンは一緒に逃げた父の近衛兵 アルクとの連絡手段がこれであつた。

フォンはおもむろに身を起し、鳩の脚に装着されている手紙を奪い眺めた。

『親愛なる若君へ』

そちらの調子は如何でしょうか。俺は別部隊で行動をしていますが、たがようやく革命軍も形になり、もう少して動き出せそうです』

革命軍

それが、アルクの考えるもう一つの案であつた。現在の王政を倒し、立憲君主制を実現させる。過去の過ちは繰り返さない。絶対王政の政治体系では昨今の人民達を満足させることはできない。そう判断してのことであつた。もちろん、その君主とは他ならぬ 口

ンド・ジ・グレゴリオその人であった。

『つきましては、そちらの状況次第ですがアリエル姫を人質として国王と取引をしたいという案も挙がっております。若君が手筈どおり姫を籠絡することに成功したならばお知らせください。俺たちも若君への迎えを出したいと考えています。元々無理な要求だとは思いますが少しでも示唆してくれば有り難いです。

次は

よかった。

そこまで読み進める段階で、フォンは心の底からそう思った。これで、無下にアリエルを殺す必要は無い。逆に、これで彼女を殺してしまえば革命の動きが滞るのは目に見えていた。フォンは迷うことなく鳩に自らの未来を書き記した書物を持たせ、闇夜に飛ばした。希望の光を映し出す月はやさしく微笑んでいた。

ビシユ又城は小高い丘に設立されている。何度もそう言ってきたが、今その意味が分かるだろう。つまり、逃げるのはそう簡単ではないということである。

だが存外、事態は滞りなく速やかに進められた。まず決行したのは数日後の深夜である。アリエルの部屋へ適当な理由を付けて侵入し、その窓から脱出を図る。

全てが予定通りだった。最初はアリエルの部屋へ着く前に何かトラブルが発生するのではないかと危惧したが何も無い。窓の外へ降りる際にすら何も起きない。

おかしい。

心の中にある疑念が徐々に膨らみ始める。

深夜の月は綺麗で、星たちがその背景を葉鮮やかに彩っていた。先ほど抱きかかえたせいかな鼻孔を撫でるのはアリエルの香りだけである。城から逃げ出すため彼らは走り出していた。

何かが、おかしい。

それは形になり、心を侵食する。

吐く息は暖かく、吸うべき息は氷のよう。息が切れる。肺の内部が冷気で満たされる。まだ安心はできない。革命軍が待っているはずの地点までまだ距離があった。

何故何も起きない？

おかしかったのだ。ここに至るまで城の警備どころか、防衛線までありはしなかった。そう、まるで誰かが意図的にそうしたような

アリエルの脚が止まった。つられてフォンもその場に立ち止まる。アリエルは息が上がっていた。疲れたのだろう、フォンは楽観的に考えていたがそうではなかった。

「ねえ、フォン」

アリエルは語りだす。

「どうして、こんなにも城の警備が薄いんだと思いますか？」

何？

フォンは心の中で呟いた。何故ならばアリエルのその言葉は確実に疑念の的を得ていたからだ。森の中に入っていた。彼らの囁きは妙に心をざわめかせていた。フォンは口の中が乾いていくのを感じた。

「あなたに話しておかなければいけないことがあります」

真剣な表情であった。

あなたは今何を言おうとしている？

「わたくしは あなたが旧グレゴリオの王子であることを知っています」

え？

意味が分からなかった。何が起きている。フォンは状況が理解で

きない。混乱する。落ち着くことができない。自分の演技に何か不手際でもあったのか？ いや、そんなはずはない。自問自答が頭の中で連鎖する。

「もちろんお父様もです。あなたがこの城に仕えたいと進言した時にお父様はあなたの素性を全て調べ上げました。父様は後悔していました。国を滅ぼし、グレゴリオ家の未来を闇に葬ったことを。あなたが簡単に逃げ延びることができたのは父上の指示でもあったのです。父上は悩みました。この青年をどうすべきかと、城の者たちとも相談しました。マルクなどは殺すべきだと提案していました。それでもあなたを執事として招き入れたのはわたくしの我侭だったのです」

「な、何で……」

「覚えていますか？ 昔のことですけど、あなたとは面識があるのですよ？」

記憶の棚から必要なものを引き出す。

ああ、そうだ。

あなたはそう

幼少の頃の遠い記憶。フォンは確かにアリエルと会っていた。何もかも懐かしかった。あの頃のアリエルはやはり人見知りが激しく大人しい少女だった。おぼろげにそう記憶していた。

わたしは一人なの……。

「あなたは優しくかったわ。親の仇であるはずのわたくしにも優しく接してくれたわ。たとえ演技だったとしてもわたくしはあなたの優しさに涙が出そうになるの。その度にわたくしは嘘をつきました。

もう眠くなってしまったわ、と」

精神が瓦解する。

僕は何のために今までやってきたんだと。所詮僕のやってきたことに意味なんてなかったのかと。心を穿たれた。当然この脱走劇もお芝居。全て城の内部に筒抜けだろう。もう逃げるべき場所は何処にも無かった。

じゃあ僕が友達だいいちごうだね。

「でも、そんな日々を過ごしている内にわたくしの心の中にはあつてはならない感情が芽生え始めていました。わたくしのしたかったことは贖罪です。あなたにせめてこの平穏な日々の中で静かに暮らしてもらえたら、そう思っていたはずでした。でも、実際に共に過ごす時間の中でわたくしはあなたのことを特別な存在として意識し始めていたのです」

これもお芝居なのか？

もうフォンには事実と虚無の区別はつかなくなっていた。事實は虚無に見え、虚無は事実に見える。アリエルの言葉すら彼の耳には届かなかった。

「お父様には既に見張りをつけられないようにと頼んであります。だからフォン、今度こそわたくしはあなたに命令……いえ、お願いします。一緒に、この間々ならない現実から逃げてください」

「何で」

フォンは呟き始める。

「何でお前なんかと逃げなくちゃいけないんだ！」

心の叫びを形にする。

「お前は僕の両親の仇なんだぞ！？ 分かっているのか！」
押し倒す。

草むらの中にフォンとアリエルは包み込まれる。

こんな時ですらアリエルの匂いに欲情する自分が酷く情けなかった。

「分かっています。わたくしはそれでもあなたのことを 愛しています。この数年のあなたと過ごした日々は大切なものです」

知れず涙が零れていた。

アリエルのものではない。フォンのものだった。

「何で、何でお前はそんなことを言うんだ。僕はお前の敵なんだぞ？ 僕はお前を殺そうとしていたんだぞ？ それでもお前は僕のことを」

口付けされた。

息のかかる距離。

ほのかに甘かった。

アリエルの唇は恐ろしいほどに柔らかくて、熱くて、感覚が麻痺する。冷たいこの冷気の中でこの箇所だけが暖かった。

「あなたは言うてくれましたよね。地の果てまでもあなたをお守りいたしますって。わたくしはたとえ嘘だったとしてもその言葉が嬉しかったのですから」

唇は離される。

残り香が現実味を帯びていた。

自分は親の敵とそんなことをしてしまった。自嘲する。そして受け入れる。

この少女は本当に自分のことを愛しているのだと。

言葉は力を持っている。その力は思いまでを捻じ曲げてしまうのだろうか。

凄まじい轟音。

突然の銃声。耳を劈くよう。

激しい音と共に身体が揺れるのを感じた。

「姫様に何をするっ。この下郎が！」

突然に、周りから伏せていた兵士達が飛び出して来る。それを率いていたのはフォンが大嫌いな將軍、マルクであった。

「な、何故、何故ですか！ お父様には見張りを付けるなどお願いしておいた筈です。嫌っ、フォン！」

アリエルとフォンは引き離された。兵士達はフォンには触れてはいない。凶弾を受けたフォンはもう虫の息だったからだ。

ああ、そうか。

フォンは心の中で納得する。

これが、神に背いた者の末路なんだと。この赤き涙が自分を地獄

へと誘うのだと。薄れ行く意識の中でおぼろげにそう思った。

「ふんっ。グレゴル人が。やはり貴様らはそうやって地面を舐めているのがお似合いだ」

踏みつけられる。マルクの脚は非常に重く顔が潰されそうであった。

伝えたい言葉があった。

「放しなさいっ。わたくしは、わたくしはっ」

今抵抗している彼女にだ。血の匂いがした。だんだんとそれ以外の感覚は薄れていく。

騙っていて悪かったと。

フォンはその一言が言いたかった。

叶わない。

微かな望みはマルクの汚らわしい脚の重さで押しつぶされた。

真新しい闇がフォンを誘う。その中にさえ

母上申し訳ありません僕は

真に平和な記憶など無かった。

『わたしは一人なの……』

目の前の少女がそう言った。悲しげなその姿を見て、僕は励ましてあげなくちゃいけないと、そう思った。

『じゃあ僕が友達だいいちごうだね』

『本当に……？』

うん、とだけ僕は答えた。

『じゃあ、これからずっといつしよだね』

うん、と僕は答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3067k/>

眠り姫

2010年10月8日12時05分発行